蓑虫と蜘蛛

寺田寅彦

二階の縁側のガラス戸のすぐ前に大きな楓（かえで）が空いっぱいに枝を広げている。その枝にたくさんな蓑虫（みのむし）がぶら下がっている。

去年の夏じゅうはこの虫が盛んに活動していた。いつも午（ひる）ごろになるとはい出して、小枝の先の青葉をたぐり寄せては食っていた。からだのわりに旺盛（おうせい）な彼らの食欲は、多数の小枝を坊主にしてしまうまでは満足されなかった。紅葉が美しくなるころには、もう活動はしなかったようである。とにかく私は日々に変わって行く葉の色彩に注意を奪われて、しばらく蓑虫の存在などは忘れていた。

しかし紅葉が干からび縮れてやがて散ってしまうと、裸になったこずえにぶら下がっている多数の簑虫が急に目立って来た。大きいのや小さいのや、長い小枝を杖（つえ）のようにさげたのや、枯れ葉を一枚肩にはおったのや、いろいろさまざまの格好をしたのが、明るい空に対して黒く浮き出して見えた。それがその日その日の風に吹かれてゆらいでいた。

かよわい糸でつるされているように見えるが、いかなる木枯らしにも決して吹き落とされないほど、しっかり取りついているのであった。縁側から箒（ほうき）の先などではね落とそうとしたが、そんな事ではなかなか落

ちそうもなかった。

自分は冬じゅうこの死んでいるか生きているかもわからない虫の外殻（がいかく）の鈴成りになっているのをながめて暮らして来た。そして自分自身の生活がなんだかこの虫のによく似ているような気のする時もあった。

春がやって来た。今まで灰色や土色をしていたあらゆる落葉樹のこずえにはいつとなしにぽうっと赤みがさして来た。鼻のさきの例の楓（かえで）の小枝の先端も一つ一つふくらみを帯びて来て、それがちょうどガーネットのような光沢をして輝き始めた。私はそれがやがて若葉になる時の事を考えているうちに、それまでにこ

の蓑虫を駆除しておく必要を感じて来た。
　たぶんだめだろうとは思ったが、試みに物干し竿の長いのを持って来て、たたき落とし、はね落とそうとした。しかしやっぱり無効であった。はねるたびにあの紡錘形の袋はプロペラーのように空中に輪をかいて回転するだけであった。悪くすると小枝を折り若芽を傷つけるばかりである。今度は小さな鋏を出して来て竿の先に縛りつけた。それは数年前に流行した十幾とおりの使い方のあるという西洋鋏である。自分は今その十幾種のほかのもう一つの使い方をしようというのであった。鋏の発明者も、よもやこれが蓑虫を取る

ために使われようとは思わなかったろう。鋏の先を半ば開いた形で、竿の先に縛りつけた。円滑な竹の肌と、ニッケルめっきの鋏の柄とを縛り合わせるのはあまり容易ではなかった。

　ぶらぶらする竿の先を、ねらいを定めて虫のほうへ持って行った。そして開いた鋏の刃の間に虫の袋の口に近い所を食い込ませておいてそっと下から突き上げると案外にうまくちぎれるのであった。それでもかなりに強い抵抗のために細長い竿は弓状に曲がる事もあった。幸いに枝を傷つけないで袋だけをむしり取る事ができたのである。

あるものは枝を離れると同時に鋏を離れて落ちて来た。しかしまたあるものは鋏の間に固く食い込んでしまった。始めからおもしろがって見ていた子供らは、落ちて来るのを拾い、鋏（はさみ）にはさまったのをはずしたりした。二人の子が順番でかわるがわる取るのであったが、年上のほうは虫に手をつけるのをいやがって小さなショベルですくってはジャムの空罐（あきかん）へほうり込んでいた。小さい妹のほうはかえって平気で指でつまんで筆入れの箱の上に並べていた。

庭の楓（かえで）のはあらかた取り尽くして、他の木のもあさって歩いた。結局数えてみたら、大小取り交ぜて四

十九個あった。ジャムの空罐一つと筆入れはちょうどいっぱいになった。それを一ぺん庭の芝生(しばふ)の上にぶちまけて並べてみた。

一つ一つの虫の外殻(がいかく)にはやはりそれぞれの個性があった。わりに大きく長い枯れ枝の片を並べたのが大多数であるが、中にはほとんど目立つほどの枝切れはつけないで、渋紙のような肌(はだ)をしているのもあった。えにしだの豆のさやをうまくつなぎ合わせているのもあって、これがのそのそはって歩いていた時の滑稽(こっけい)な様子がおのずから想像された。

なかんずく大きなのを選んで袋を切り開き、虫がど

うなっているかを見たいと思った。竿（さお）の先の鋏（はさみ）をはずして袋の両端から少しずつ虫を傷つけないように注意しながら切って行った。袋の繊維はなかなか強靭（きょうじん）であるので鈍い鋏の刃はしばしば切り損じて上すべりをした。やっと取り出した虫はかなり大きなものであった、紫黒色の肌がはち切れそうに肥（ふと）っていて、大きな貪欲（どんよく）そうな口ばしは褐色（かっしょく）に光っていた。袋の暗やみから急に強烈な春の日光に照らされて虫のからだにどんな変化が起こっているか、それは人間には想像もつかないが、なんだか酔ってでもいるように、あるいはまだ長い眠りがさめきらないようにものうげに八

対の足を動かしていた。芝生の上に置いてもとの古巣の空(あ)きがらを頭の所におっつけてやっても、もはやそれを忘れてしまったのか、はい込むだけの力がないのか、もうそれきりからだを動かさないでじっとしていた。

もう一つのを開いて見ると、それはからだの下半が干すばって舎利(しゃり)になっていた。蚕にあるような病菌がやはりこの虫の世界にも入り込んで自然の制裁を行なっているのかと想像された。しかし蓑虫(みのむし)の恐ろしい敵はまだほかにあった。

たくさんの袋を外からつまんで見ているうちに、中

空で虫のお留守になっているのがかなり多くのパーセントを占めているのに気がついた。よく見ていると、そのようなのに限って袋の横腹に直径一ミリかそこらの小さい孔（あな）がある事を発見した。変だと思って鋏（はさみ）でその一つを切り破って行くうちに、袋の中から思いがけなく小さい蜘蛛（くも）が一匹飛び出して来てあわただしくどこかへ逃げ去った。ちらりと見ただけであるがそれは薄い紫色をしたかわいらしい小蜘蛛であった。

　この意外な空巣（あきす）の占有者を見た時に、私の頭に一つの恐ろしい考えが電光のようにひらめいた。それで急いで袋を縦に切り開いて見ると、はたして袋の底に滓（かす）

のようになった簑虫の遺骸の片々が残っていた。あの肥大な虫の汁気という汁気はことごとく吸い尽くされなめ尽くされて、ただ一つまみの灰殻のようなものしか残っていなかった。ただあの堅い褐色の口ばしだけはそのままの形をとどめていた。それはなんだか兜の鉢のような格好にも見られた。灰色の壙穴の底に朽ち残った戦衣のくずといったような気もした。

この恐ろしい敵は、簑虫の難攻不落と頼む外郭の壁上を忍び足ではい歩くに相違ない。そしてわずかな弱点を捜しあてて、そこに鋭い毒牙を働かせ始める。壁がやがて破れたと思うと、もう簑虫のわき腹に一滴の

毒液が注射されるのであろう。

　人間ならば来年の夏の青葉の夢でも見ながら、安楽な眠りに包まれている最中に、突然わき腹を食い破る狼（おおかみ）の牙（きば）を感じるようなものである。これを払いのけるためには簑虫（みのむし）の足は全く無能である。唯一の武器とする吻（くちさき）を使おうとするとあまりに窮屈な自分の家はからだを曲げる事を許さない。最後の苦悩にもがくだけの余裕さえもない。生物の間に行なわれる殺戮（さつりく）の中でも、これはおそらく最も残酷なものの一つに相違ない。全く無抵抗な状態において、そして苦痛を表現する事すら許されないで一分だめしに殺されるのである。

虫の肥大なからだはその十分の一にも足りない小さな蜘蛛（くも）の腹の中に消えてしまっている。残ったものはわずかな外皮のくずと、そして依然として小さい蜘蛛一匹の「生命」である。差し引きした残りの「物質」はどうなったかわからない。

簑虫が繁殖しようとする所にはおのずからこの蜘蛛が繁殖して、そこに自然の調節が行なわれているのであった。私が簑虫を駆除しなければ、今に楓（かえで）の葉は食い尽くされるだろうと思ったのは、あまりにあさはかな人間の自負心であった。むしろただそのままにもう少し放置して自然の機巧を傍観したほうがよかった

ように思われて来たのである。簑虫にはどうする事もできないこの蜘蛛にも、また相当の敵があるに相違ない。「昆虫の生活」という書物を読んだ時に、地蜂のあるものが蜘蛛を攻撃して、その毒針を正確に蜘蛛の胸の一局部に刺し通してこれを麻痺させるという記事があった。麻痺した蜘蛛のわき腹に蜂は一つの卵を生みつけて行く。卵から出た幼虫は親の据え膳をしておいてくれた佳肴をむさぼり食うて生長する、充分飽食して眠っている間に幼虫の単純なからだに複雑な変化が起こって、今度目をさますともう一人前の蜂になっているというのである。

ある蜘蛛が、ある蛾（が）の幼虫であるところの蓑虫の胸に食いついている一方では、蓑虫のような形をしたある蜂（はち）の幼虫が、他の蜘蛛（くも）の腹をしゃぶっている。このような闘争殺戮（さつりく）の世界が、美しい花園や庭の木立ちの間に行なわれているのである。人間が国際連盟の夢を見ている間に。

ある学者の説によると、動物界が進化の途中で二派に分かれ、一方は外皮にかたいキチン質を備えた昆虫（こんちゅう）になり、その最も進歩したものが蜂や蟻（あり）である。また他の分派は中心にかたい背骨ができて、そのいちばん発展したのが人間だという事である。私にはこの

説がどれだけほんとうだかわからない。しかしいずれにしても昆虫の世界に行なわれると同じような闘争の魂があらゆる有脊椎動物（ゆうせきついどうぶつ）を伝わって来て、最後の人間に至ってどんなぐあいに進歩して来たかをつくづく考えてみると、つまりわれわれの先祖が蓑虫（みのむし）や蜘蛛の先祖と同じであってもいいような気がして来る。

　四十九個の紡錘体の始末に困ったが、結局花畑のすみの土を深く掘ってその奥に埋めてしまった。その中の幾パーセントには、きっと蜘蛛がはいっていたに相違ない。こうして私の庭での蓑虫と蜘蛛の歴史は一段落に達したわけである。

しかしこれだけではこの歴史はすみそうに思われない。私は少なからざる興味と期待をもってことしの夏を待ち受けている。

（大正十年五月、電気と文芸）

底本：「寺田寅彦随筆集　第一巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店
　　　１９４７（昭和22）年２月５日第１刷発行
　　　１９６３（昭和38）年10月16日第28刷改版発行
　　　１９９７（平成９）年12月15日第81刷発行
入力：田辺浩昭
校正：かとうかおり
１９９９年11月17日公開
２００３年10月22日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。